（ 続紙 １ ）

| 京都大学 | 博士（地球環境学） | 氏名 | 時　任　　美　乃　理 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | ベトナム中部山岳農村におけるモノカルチャー化と地域レジリエンスに関する研究 | | |

（論文内容の要旨）

ベトナム社会主義共和国（以下，ベトナム）の森林保全を目指した定住定耕政策や森林政策等の方策は，経済をも同時に改善する政府の意図が含まれていた。結果，統計上，経済は活性化し，大規模な造林による森林率の回復を成し遂げたが，経済発展と森林保全というある意味では相反する事象を早急かつ同時に目指したことから，地域的に様々な課題が表面化している。本論文は，そうした課題に関して，ベトナム中部山岳地域に多数居住する少数民族の生業，地域資源利用および外部組織からの生業支援に着目し，持続可能な発展の在り方を探求したもので，９章からなっており，以下に各章の内容を説明する。

第１章は，序論であり，既往論文を概説しながら，東南アジアで成立した多様な産業造林地拡大の背景とその是非を整理している。その上で，本論文の位置づけ，目的および全体構成を示している。

第２章では，ベトナムの基本概要を紹介した上で，調査対象地域であるベトナム中部山岳地域の概要として自然・社会環境，民族や地域産業の歴史的変遷について紹介し，森林政策と定住定耕政策が山岳農村に与えた影響と，それらの方策が生まれた社会背景，および結果としてもたらされた産業造林の拡大状況について説明している。

第３章では，土地利用の多様度を定量化することができる「改良さとやま指数」を用いて，対象地域の土地利用分布の評価を行っている。その際に，分析単位の取り方に独自な計算方式を取り入れ，東南アジア特有の微細な土地利用の連続性を評価することを可能とした。得られた結果を空間解析し，対象地域の土地利用の分布特性を明らかにしている。

第４章では，全世帯への聞き取り調査を元に，生業構造の実態を明らかにした。アカシア林業へ強く依存している世帯が多数あること，加えてアカシア林業に付随する労働を収入源としている世帯も存在することを明らかにし，生業構造の脆弱性を指摘している。

第５章では，外部の援助機関等が実施してきた林業支援プロジェクトにおいて支援する世帯を選定する際に，世帯が持つ林業地の自然条件を鑑みる必要性があることを林業地ごとの材搬出難度を定量的に評価し，実証している。

第６章では，アカシア林での萎凋病被害の実態を示した上で，住民の森林資源利用が結果的に萎凋病被害の拡大を防いでいること，同時にこうした森林資源利用が都市化の影響を受けて，徐々に失われていることを示している。

第７章では，ホームガーデンで栽培されている救荒作物を精査し，モノカルチャー化進行地域におけるホームガーデンの役割と重要性を示し，また，地域に遺存する習

慣としてタロイモ栽培とその利用方法に着目し，ホームガーデンが持つ地域内潜在力を示している。

第８章では，外部の援助機関等が実施してきた家畜導入支援プロジェクトにおいて，家畜導入後の飼育状況を精査した上で，世帯によっては支援を受けることによってそれまでに行ってきた生業が影響を受けてしまうこと，支援前よりも経済的に困窮する事例もあることを示し，家畜支援を行う世帯を選定する上で検討が必要な諸条件を提示している。

第９章は，結論であり，各章で示された主要な成果をまとめ，当該地域の発展段階に応じた適切な地域資源の利用，および遺存的習慣等で維持されてきた地域レジリエンスの意義を改めて考えることの必要性を述べている。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

ベトナムは１９８６年のドイモイ政策を契機として社会主義体制を維持しながら経済を自由化し，森林を民間に分配し国民の自助努力を喚起して農村経済の活性化と森林面積の回復を目指した。また，山岳地域で少数民族が営んでいた焼畑耕作を禁止し，定住化を促進し，新たな生業として産業造林を推奨してきた。その結果，ベトナム中部では，アカシア林業が大規模に実施される事となり，少数民族の多くはアカシア林業による収入に大きく依存している。そのため，生業の多様性が徐々に喪失し，みえにくい形で地域のレジリエンスが消失しつつある。

本論文はこうした課題に対して，精緻な現地調査と地域分析を通じて研究を行ったものであり，得られた主な成果は以下の通りである。

第一に，対象地域の集落において，１５１世帯の悉皆調査を実施し，アカシア林業を行っている世帯以外にも，アカシア林業の伐採・運搬に係わる労働によって得た賃金を収入源としている世帯があることを示し，統計情報では表面化されなかったアカシア林業に特化している地域の現状と脆弱性を指摘した。地域の持続的発展を目指す上で地域計画学の観点から有用な情報を提示している。

第二に，地域資源利用や副次的生業が生業の多様性を確保し，フェイルセーフの機能も果たすことを示し，そうした生業は現時点でも遺存され持続していると同時に，アカシア林業の導入に伴う経済的変化や林業地の拡大によって緩徐に失われつつあることを指摘し，地域資源管理の観点から重要な提言を行っている。

第三に，生業の多様性と所得向上を目指した外部支援として家畜支援を取りあげ，家畜の運用が支援以前に行われていた生業や生活環境に間接的に影響を与えること，および，支援が行われた世帯に長期にわたって家畜運用を維持する適性がない場合には，支援後も世帯所得が増えない，あるいは逆に以前よりも世帯所得が少なくなる可能性もあることを指摘した。途上国農村への外部支援が抱える課題を示しており，実践的かつ社会的意義が大きい。

以上のように本論文は，ベトナム中部山岳地域における少数民族が抱える諸課題を精緻なフィールド調査を通じて抽出し，生活レベルを維持しつつ発展していくための具体的な提言を行っている。また，都市化，開発，外部支援といった影響を受けている多くの途上国農村が持つ共通する諸課題に対する普遍性を備えた研究成果を挙げており，地域計画学，地球環境学に寄与するところが大きい。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成３０年２月９日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。

なお，本論文は，京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し，公表に際しては，（平成３１年３月３１日までの間）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公開可能日：　平成３０年　３月２６日以降